

**平成23年度
大規模肉用牛経営動向調査
報告書
【要約版】**

平成24年2月

alic 独立行政法人農畜産業振興機構

1. アンケート調査

(1) 肉用牛の飼養頭数規模

- 本調査における肥育牛飼養頭数規模別の経営体数は、200頭以上が67%を占め、中でも1,000頭以上は24%を占めた。F1や乳用種は、黒毛和種と比較すると飼養頭数は概して多くなる。
- 平成22年3月末と平成23年3月末を比較では、飼料価格の高騰や口蹄疫発生の影響等からか飼養頭数がやや減少し、特にF1・乳用種の減少が目立つ。

(2) 経営体の取り組み部門及び売上高

- 経営内容は「肉用牛肥育」が200頭未満では44%、200頭以上で61%を占めている。
- 肉用牛部門の売上高は全体では「～1億円未満」が39%、「1～2億円未満」が20%、「2～5億円未満」が22%、「5億円以上」が19%となる。

(3) 労働力

- 家族労働力は、肥育牛飼養頭数規模200頭以上では、「1人」が22%、「2人」が28%、「3人」が24%となり、「4人以上」も25% (1/4) を占める。
- 正社員は、肥育牛飼養頭数規模200頭以上では、10人未満で83%を占める。
- 非正社員は、肥育牛飼養頭数規模200頭以上では、「～5人未満」が90%と大半を占める。
- 年間臨時雇用者は、肥育牛飼養頭数規模200頭以上では「50人日以上」が59%。
- 肉用牛関連作業の1日当たりの平均労働時間は、肥育牛飼養頭数規模200頭以上では「8.2時間」。

(4) 平成22年度の肉用牛の出荷状況

- 肥育牛出荷時の1頭当たりの平均販売価格は、200頭以上では、「黒毛和種」は自家保留が737,135円、外部導入が784,229円。
- 肥育牛・外部導入時の1頭当たりの平均購入価格（もと畜の価格）は、200頭以上で「黒毛和種」は366,655円。スケールメリットを活かしてか、もと畜購入価格はやや安価。

(5) もと畜の導入状況（平成22年度）

- 子牛の導入先は、黒毛和種は「家畜市場」が9割前後、F1も「家畜市場」が7割前後。乳用種は「農協（47%）」と「家畜市場（40%）」が多い。
- 肥育牛飼養頭数200頭以上の経営体の子牛導入価格は「黒毛和種」が36.2万円、「F1」が19.7万円、「乳用種」が8.6万円。
- もと畜の導入重視点は、「体型の良し悪し」「血統」「発育状態」「健康状態」が上位。
- もと畜の購入価格感を見ると、理想価格・妥協価格は「35～40万円未満」。

(6) 繁殖雌牛の種付方法や費用等

- 精液及び受精卵の外部購入の割合は、黒毛和種では「精液」が9割と圧倒的に多い。「受精卵」も7割が外部導入による。
- 精液・受精卵代、技術料ともに、黒毛和種では飼養頭数200頭以上の方が費用は安い。

(7) 飼料・敷料の利用状況等

- 1頭1日当たりの給与飼料量は、飼養頭数200頭以上の方が多（9～10kg前後）。また、90%前後が外部購入飼料である。購入飼料の単価は、飼養頭数200頭以上の方がやや安価に仕入れている（1kg当たり＝45円前後）。
- 1頭1月当たりの敷料使用量は、200頭以上の方が使用量は少ない（1m³前後）。敷料1m³当たりの単価もおおむね200頭以上の方がやや安価（1,900円台）。

(8) 平成22年度の1経営体当たりの平均諸費用

(万円)

		及 び 獣 医 薬 品 費	水 道 ・ 光 熱 費	償 却 費	施 設 ・ 設 備 の 修 繕 費	農 地 地 代	牧 場 預 託 金	委 託 料	出 荷 数 料 ・ 経 費	そ の 他
全体		567	420	968	312	233	2,866	147	1,760	1,872
肥育牛・ 飼養規模別	200頭未満・計	121	105	233	106	69	407	86	117	255
	200頭以上・計	779	566	1,285	410	301	3,549	203	2,600	2,412

(9) 経営に関する取り組み

- 経営に関する取り組みは、「低廉な飼料調達」「もと畜を低コストで導入」「低価格な敷料調達」といった生産費の低コスト化への経営努力が多い。
- 今後3年間の経営展開は、「現状維持」が4割。一方、「肉用牛（肥育）の規模拡大」が2～3割。

(10) 肉用肥育牛1頭当たりの生産費構造

<黒毛和種>

飼養頭数規模別	もと畜費 (円)	飼料費 (円)	敷料費 (円)	獣医師料及 び医薬品費 (円)	光熱水料 (円)	償却費 (円)	施設・設備 の修繕費 (円)	労働費 (円)	費用 合計 (円)	平均販売 価格 (円)
全体	367,492	250,537	18,659	8,866	7,936	17,930	6,277	34,593	712,290	758,728
200頭未満・計	370,004	259,534	24,012	8,576	7,521	18,249	7,277	31,203	726,375	746,082
200頭以上・計	366,655	246,764	16,021	9,135	8,337	17,625	5,316	38,028	707,880	764,260
100頭未満	339,604	272,971	31,628	9,609	7,861	22,461	7,387	24,229	715,750	700,066
100～200頭未満	385,204	242,144	14,922	6,448	6,781	10,088	7,063	48,321	720,971	800,725
200～300頭未満	337,571	252,041	14,234	8,971	7,932	22,843	6,664	31,836	682,093	752,764
300～500頭未満	388,149	241,350	15,856	10,898	11,480	19,901	5,267	47,612	740,513	775,937
500～1,000頭未満	372,767	244,624	17,005	7,740	7,116	13,719	5,147	42,440	710,559	790,470
1,000～2,000頭未満	386,285	229,568	13,704	8,622	5,232	7,912	3,015	27,794	682,130	717,029
2,000～3,000頭未満	327,600	265,644	20,917	11,233	9,759	27,849	5,755	19,992	688,749	633,435
3,000頭以上	338,250	262,331	17,414	5,128	2,315	10,152	3,131	13,230	651,952	804,127

- 上記は黒毛和種の出荷1頭当たりの生産費を算出したものである。生産費における「もと畜費」「飼料費」が占める割合は合算すると、おおむね8割前後。

2. 現地調査

(1) 血統と1牛房1頭の個別管理による肉質重視型の大規模肥育牛経営

- 平成22年度、IT牧場（三重県）では、常時飼養頭数は肥育牛340頭である。年度始も年度末も同じ飼養頭数であり、安定した時期にある。肥育牛はすべて黒毛和種のめす（松坂牛）である。肥育牛経営だけではなく、水田経営も行っている。

- 肉質（サシ）を決定づける要因の8～9割は血統によると経営主はいう。あとの1～2割が飼料（種類や配合割合等）や飼い方によるとみている。したがって、血統を重視し、その時々によい血統を調べて（東京市場）もと畜の導入先を決めている。導入先は当初、兵庫県（但馬牛）であったが、その後、岩手県（前沢牛）、宮城県、宮崎県、そして現在は鹿児島県からというように変遷。



各牛房に1頭ずつ入れて個別管理

- 導入された牛はすべて各牛房に1頭ずつ入れられ、個別管理される。導入から出荷まで一つの牛房に1頭で、生育に合わせて牛房を移動する。個別管理がゆき届いているため、事故はほとんどない。

(2) 自家配合飼料による増体重視型の大規模肥育牛経営

■平成22年度、I Y牧場（兵庫県）では、常時飼養頭数（年度始と年度末の飼養頭数の平均）は肥育牛465頭である。肥育牛は現在すべて黒毛和種の去勢若齢牛であるが、22年度の年度初めにはまだ交雑牛36頭がいた。交雑牛から去勢和牛への移行期であったからである。

■もと畜の導入は、増体重視一辺倒ではなく、危険分散も考えて品質の良い牛も取り入れている。牛肉の価格変動を見据えての対応である。総じて子牛価格が安い時期に購入。

■飼料は商系から買う配合飼料に、ウイスキー粕と大豆乳しょうを混ぜて自家配合し、肥育牛に給与。液体の大豆乳しょうを粉末の濃厚飼料に加えることによって牛の食い込みがよくなる。そのことによって増体をよくし、平均830kg（生体重）で出荷している。



ウイスキー粕

(3) 血統や生産者実績等をもと畜選定ポイントとした肉質重視の和牛生産

■A牧場（宮城県）は黒毛和種去勢牛の肥育牛経営で、牛舎は導入牛舎（導入から4カ月間飼養）が2棟（48頭用と40頭用）、肥育牛舎が2棟（104頭用と64頭用）。常時飼養頭数は250頭。

■特徴的な取り組みとしては、諸作業の内製化、ふん尿処理作業の省力化、牛舎施設の周囲すべてを舗装等。

■肥育もと畜は家畜市場で購入。導入市場は宮城県と青森県の2カ所で、導入頭数はほぼ半々。家畜市場には経営主が毎月行って購入する。もと畜選定のポイントは血統、育種価、発育、体型、生産者実績であり、なかでも青森県では「第1花園」、宮城県では「茂勝」「茂洋」の系統が選ばれる。A牧場では両県市場平均に比べ、発育がよく、かなり価格の高い子牛を購入。



肥育牛舎

(4) グループ経営の連携と地域資源を活用した大規模肥育牛経営

■B牧場（青森県）は乳用種および交雑種の哺育・育成から肥育までの一貫生産を行い、黒毛和種繁殖牛も飼養する大規模肉用牛経営。牛舎施設は離農跡地を買い取るなどして施設が多いため3カ所に分散し棟数も多い。常時飼養頭数（平成23年3月）は哺育・育成牛が交雑種194頭、乳用種425頭、黒毛和種40頭、肥育牛が交雑種752頭、乳用種642頭、繁殖牛が90頭。



第一牧場の肥育牛舎群

■B牧場の経営主は、建設会社（C建設）から事業を起こし、B牧場を設立してから経営規模の拡大を果たしてきたが、その他にも、D物産を設立するなど多角的に事業を展開。D物産の主な事業は堆肥製造販売と運搬業（貨物・旅客）であり、堆肥製造ではB牧場から購入したふん尿を原料としている。貨物業務ではB牧場のもと畜や肥育牛、配合飼料を運搬するなど、B牧場と一体的に事業を行っている。また、C建設はB牧場の牛舎建設を請け負う一方、B牧場ではC建設から中古重機を譲り受けるなど、補合的な業務内容になっている。

■B牧場には35haの飼料生産用地があり、牧草（リードカナリー、チモシー）を生産。また、稲わらはすべて津軽産を使用する。